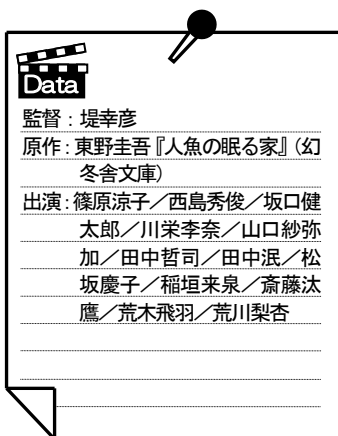




みどころ

かつては人の死亡の定義など必要なかったが、“脳死問題”が出現すると、臓器移植を巡って法的な“脳死判定”が不可欠に。だが、人魚のように眠っているこの可愛い女の子は、脳死＝死人なの？しかも最新の医療技術によって彼女は身体が動き、新陳代謝による身体の成長も伴っているのに・・・。

“作家生活30年を経てたどり着いた東野ミステリーの到達点”を堤幸彦監督が映画化した本作は、脳死を巡る社会問題提起の他、母親役の篠原涼子が熱演する“人間ドラマ”も興味深い。さあ、「娘を殺したのは、私でしょうか。」の問に対する、あなたの答えは・・・？

■東野ミステリーの到達点は？そのテーマは？■

1958年生れの東野圭吾は1985年に作家としてデビューしたが、以降ヒット作を量産し、『容疑者 X の献身』（08年）（『シネマ 21』143頁）、『ナミヤ雑貨店の奇蹟』（17年）（『シネマ 40』254頁）、『ラプラスの魔女』（18年）（『シネマ 41』未掲載）、『祈りの幕が下りる時』（18年）（『シネマ 41』77頁）等が次々と映画化されてきた。本作は、そんな東野圭吾の作家生活30年を経てたどりついた“東野ミステリーの到達点”らしい。そのためチラシには、「生か死か善か悪か愛か欲かー禁断の東野圭吾ミステリー。」「教えてください。娘を殺したのは、私でしょうか。」「狂ってでも、守りたいものがある。」「その選択は、奇跡を起こせるのかー」「この愛の結末に涙が止まらない」等の文字が躍っている。

しかして、東野圭吾ミステリーの到達点とは一体ナニ？また、本作のテーマは一体ナニ？

■イスで眠っている女の子は脳死！しかし脳死ってナニ？■

本作冒頭、今ドキ珍しく道路上でボール遊びをしている男の子たちのボールが空高く舞

い上がり、ある豪邸の庭の中に入っていく。ほとんどの子はそのお屋敷の広大さに恐れをなして中に入れなかったが、1人だけは錠門を開けて中に入り、玄関に通じる通路へ。すると、その通路は庭の方にも通じていたうえ、その雰囲気はまるで“人魚の眠る家”のようなメルヘンチックなもの。通路を通り抜けて庭に出ると、“おとぎの国”のような、リビングルームからそのまま外に出られる大きなお庭だ。その庭には子供用の滑り台が備え付けられ、数名が楽しく走り回れるほどの広さだったが、そこには走り回る子供はおらず、1人椅子に固定されて眠ったままの可愛い女の子がいるだけだった。

本作の主人公はIT機器メーカーであるハリマテクスの二代目社長の播磨和昌（西島秀俊）と、その妻播磨薫子（篠原涼子）。場所は特定されていないが、都心部にあるにちがいないその夫婦のお屋敷は、1956（昭和31）年第55代内閣総理大臣に就任した、政治家・石橋湛山の自宅を使用したとのことで、その広さは今時考えられないものだ。椅子で1人眠っている女の子はこの夫婦の長女で、6歳の瑞穂ちゃん（稲垣来泉）だが、なぜ彼女はずっと眠っているの？それは、脳外科医の進藤（田中哲司）から“脳死”診断されているためだ。しかし、脳死って一体ナニ？眠っているものの、きれいに着飾っているし、ちゃんと息もしているのに、瑞穂はなぜ脳死なの？そして、この瑞穂が脳死だとすれば、この椅子に眠っている女の子は死人なの？

■□■人の死は脳死？心臓死？臓器提供の可否は？■□■

何をもって人の死とするかは、医療の進歩した今でこそ難しいが、古来人間の死は心停止であることが自明であった。そのため、医師は人の死亡の際には①呼吸、②脈拍、③対光反射の消失の3つを確認すればよかった。しかし、医療技術の発展によって、脳の心肺機能を制御する能力が喪失しても、人工呼吸器の活用によって呼吸と循環が保たれた状態が出現することとなった。そのため、かつては超昏睡とか不可逆昏睡と呼ばれていた“脳死”状態を、人の死というのか否かが問題になったわけだ。しかして、今の日本では、臓器提供時を除き、脳死を個体死とすることは法律上認められていない。

他方、人が死亡した場合、死亡した人の臓器提供を巡って、本人の意思確認が問題になる。しかし、脳死の場合は、この意思確認の他、法的に死亡と判定できるのか否かという問題があるため、そこで「臓器の移植に関する法律」第6条による“脳死判定”が必要となる。これ以上、詳しくは、さまざまな文献を参照してもらいたいが、本作ではとにかく、ある日プールの中で溺れたことによって意識不明となり、進藤医師から脳死状態だと診断された瑞穂は、心臓は生きているが永久に眠りから覚めることはないと判断され“脳死”だと判断されてしまったわけだ。

突如訪れた、可愛い娘のそんな状態を両親はどう受け止めるの？プールに同行していた祖母千鶴子（松坂慶子）は「私がちゃんと見守っていなかったから・・・」と半狂乱状態だし、一緒に遊んでいた母・薫子の妹・美晴（山口紗弥加）の一人娘・若葉（荒川梨杏）や、瑞穂の弟・生人（斎藤汰鷹）たちも混乱状態に陥ったのはしかたない。ところが、そ

んな中でもあくまで客観的で冷静なのは医師だけ。そこで、進藤医師は、和昌と薫子に対して脳死とは何か？脳死判定とは何か？を説明したうえ、“脳死”状態にある瑞穂の臓器移植の意志の有無について、瑞穂にかわって両親にその確認を求めた。しかし、これっていくら医師の義務とはいえ、少し早すぎるのでは？私はそんな違和感をもちつつ、和昌と薫子の決断を見守ったが・・・。

■□■生への希望に根拠は不要？！篠原涼子の熱演に注目！■□■

6歳の娘が自ら臓器移植への同意不同意を表明できるはずはないから、娘に変わってそれをするのは両親。本作でその任にあたるのは、離婚直前に至っていた夫の和昌ではなく、離婚後も瑞穂の養育・看護権者になることが決定的だった薫子だ。そこで必要なのは瑞穂の気持の“忖度”だが、公園で四つ葉のクローバーを見つけた時の「幸せだから持って帰らない、誰かのために残しておく」と語っていた瑞穂の気持を忖度すれば、当然臓器移植はゴー。苦渋の選択として薫子がそう決断したのは当然だろう。

ところが、家族全員がその意見で一致し、いざ臓器移植の手術に臨もうとする時、握りしめている瑞穂の手が一瞬動いたのを見つけた薫子は、一転して臓器移植を拒否。「娘は、生きています」と宣言し、娘が目覚ます奇跡を信じて、以降瑞穂の側に寄り添うようになったからすごい。篠原涼子は『アンフェア』シリーズ（07年、11年、15年）（『シネマ13』228頁）でのカッコいい雪平夏見刑事役がよく似合っていたが、本作ではほとんど母親役にこだわっている。社長夫人としてあだけ裕福な家に住み、離婚したらがっばり慰謝料をもらえる立場なのだから、2人の子供の子育てはお手伝いさんを使ってほどほどにやり、外では派手な社長夫人外交を展開していてもおかしくない立場だが、本作ではそんな感じは全くなく、瑞穂の世話のために一生を捧げる献身的な母親役を演じているので、その熱演に注目！もっとも、おばあちゃんの千鶴子が「罪滅ぼしのためにも、自分の残りの人生は100%瑞穂に捧げる」と宣言するのはわかるが、播磨家の生活のすべてがリビングルームの真ん中に据えられたベッドの中で眠る瑞穂中心に回っていくのは如何なもの・・・？弟の生人はまだ小さいのでそれに順応しているようだが、小学生にもなれば・・・？

■□■BMIとは？BRSとは？ANCとは？■□■

父親の播磨多津郎（田中泯）が創業し、5年前に和昌が社長職を引き継いだハリマテクスは、最新の医療機器を開発する会社。そこで和昌が力を注いでいるのがBMI（ブレーンマシン インターフェース：脳防護装置）だ。そのBMI開発会議でBRS（ブレーンロボット システム）に関する研究発表がされる中で、和昌が注目したのは星野祐也（坂口健太郎）が研究しているという、脳の信号を筋肉に送り手足を動かすという研究。これは、横隔神経に電気刺激を与えることによって人工的に横隔膜を動かす装置。これを使えば、脳から信号が送れない瑞穂であっても、信号を出すペースメーカーに脳の機能を備えさせれば、瑞穂が自らの筋肉を使って呼吸をすることも可能になるはずだ。そう考えた和昌はこのAIBS（人工知能呼吸コントロール）の可能性を薫子に話し、薫子も同意。星野がその

装置を開発して瑞穂の体内に電極を埋め込むと、なんと瑞穂の身体の一部が動いたからビックリ！さらに、こんな人間としての“運動”が少しずつ広がってくると、身体の新陳代謝が良くなったためか、瑞穂は眠り続けているものの、少しずつ“成長”していくことに！

脳死を宣告されてから2年余り。今や瑞穂は車イスに座ったまま、そして眠ったままだが、来客からのプレゼントを受け取ることができるようになったし、キレイに着飾られて散歩に連れて行ってもらえるまでになっていた。ここまでできているのに、脳死だから法的には死んでいるなんて言えるの？現在の医療技術の進歩にはビックリだが、さて BMI、BRS、ANC（人工神経接続技術）の等の進歩をどう考えればいいのか？

■□■堤幸彦監督は原作をよりシンプルに！テーマを明確に■□■

本作のテーマは“脳死”だが、原作では、“仮面夫婦”になっている和昌と薫子の離婚問題があるらしい。また、本作でも ANC の研究に没頭するハリマテクス社の社員星野と動物病院に勤める恋人の川嶋真緒（川栄李奈）との恋模様が、星野の生きザマを巡る論点の1つとして描かれる。原作では、その点の突っこみも相当深いらしい。しかし、本作をきっちり120分に編集した堤監督は、本作のテーマを瑞穂の“脳死”に絞り、本作のクライマックスを「答えてください。娘を殺したのは私でしょうか」に設定したため、夫婦や恋人間に絡む男女問題は必要最小限に抑えている。

星野が播磨家に入りびたり状態となり、恋人とのデートをすっぽかすようになったのは、もちろん ANC の研究に意義を見出しそこにやりがいを感じているためだが、ひょっとして美しい人妻・薫子への恋心もあったのでは・・・？逆に、播磨家に入っていく星野の後を秘かに尾行して、薫子や瑞穂と“ご対面”した真緒は、そこでこの2人をどう考えたの？真緒が応接間を飛び出していったのは、眠ったままの瑞穂が勝手に機械の指示で身体を動かしていたためだが、これをもって「瑞穂は生きている！」と感じるのか、それとも「気味が悪い！」とを感じるのかは人それぞれだ。そんな体験の中、星野と真緒の間の距離はどんどん広がっていったが、果たしてその復活はあるの・・・？

本作ではそんなサブストーリーを必要最小限に抑え、あくまで“脳死”という本作のテーマに集中しているので、観客もしっかりそれに呼応したい。

■□■このクライマックスは圧巻！あなたの答えは？■□■

本作を観ていると、今や ANC の進歩はかなりのものらしい。そのため、桜の咲く4月。弟・生人の入学式のため瑞穂を車イスに乗せて小学校の校門をくぐる薫子の姿には、一見何の違和感もないが、事情を知っている人達の反応は？そして、何よりも“死んだお姉さん”と一緒に入学式に参加した弟の反応は？また、今や毎日のように瑞穂を車イスに乗せて見せびらかすように外を出歩く薫子を心配しているのが千鶴子。そして、自分が選んだはずの ANC の技術の進歩ぶりに、今や逆に違和感を覚えるようになったのが和昌だ。喜々として ANC を操り、まるで生きているかのように瑞穂の身体を動かして、喜んでいる薫子の姿を見ていると、本当にこれでいいのか？と和昌が思い始めたのは仕方ない。こんな風

に生きている瑞穂を巡って播磨家内部での矛盾が最高潮に達する中、本作はクライマックスを迎えるので、それに注目！

そのクライマックスとは、脳死状態から2年余りを経た今の瑞穂は生きているの？それとも死んでいるの？というもの。その究極の答えを求めるため、薫子がとった行動は、包丁を持った手で自ら瑞穂の心臓をひと刺して瑞穂を殺そうとすること。しかし、ちょっと待って。瑞穂がすでに脳死で死んでいるのなら、それは殺人罪にはならないが、もし瑞穂が生きているのなら、薫子は殺人罪になるはずだ。しかし、それは薫子が最も希望していること。「私が殺人罪になるのなら、私は喜んで刑に服します。」と言い放った薫子の気持ちに、全く嘘はないはずだ。そんな事態に、和昌や千鶴子、美晴たち家族はビックリ。駆けつけてきた警察官もオロオロするばかりだし、薫子からの質問に彼らが適切な回答を出せるはずもない。そんな状況下、従妹の若菜の口から、あの時プールの中で起きたことの真相が語られると……。そんな本作のクライマックスについては、あなたの目でしっかりと。ちなみに、チラシでは東野圭吾が「原作者が泣いたらかつこ悪いという思いから懸命に涙は堪えましたが、皆さんは遠慮なく泣いてくださって結構です。」と語っているの、泣きたい人は遠慮なくたっぷりと……。

■□■原作にはない映像の追加も、ピットリ！■□■

本作のような難しいテーマを映画化するについては、あまりお説教じみではダメ。また、監督の価値観を押し付けるのは最悪で、絶対してはならないことだ。すると、堤監督は本作の結末を如何にまとめるの？クライマックス鑑賞後の私の関心はそこだったが、ある日、ソファでうたた寝している薫子の側で瑞穂の目が開いたからアレレ……。ええっ、そりゃないだろう。そう思っていると、もちろんそれは薫子の頭の中に浮かんできた風景だけで、現実の姿ではなかった。そして、その後、なるほどこういうシーンを入れることによって本作の結末を誰もが納得できる、安定したものにもっていけるのかと感心させられることに。

前述したように、映画化にあたって堤監督は、一方では原作の一部をカット（省略）したが、本作ラストでは逆に原作にない公園での散歩シーンを追加（創造）しているので、それにも注目。それは、プールの事故にあう直前に瑞穂が描いた絵を巡るストーリーだ。毎日その絵を見つめていた薫子は近くを歩くたびにその場所を探したが、見つからなかったらしい。しかし、すべてが解決した後、薫子が和昌と一緒に近く公園を散歩し、アスレチックジムの中に入ってみると、そこには瑞穂が薫子に見せたくて絵に描いた美しい景色が……。なるほど、こんなオリジナルシーンでの本作の終り方は如何にもピットリ。難しいテーマを2時間きっちり編集した堤監督の手腕に感心すると共に、難しい原作を映画化した本作の問題提起に拍手！

2018（平成30）年10月22日記